

---

# 黒い招待状

なんじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒い招待状

### 【NZコード】

N2283A

### 【作者名】

なんじ

### 【あらすじ】

なぜ平次は、黄昏の館の招待に欠席したかに迫る、問題作（＾＾）

探偵は、わずかな異変も見逃さない。＜b r＞  
平次は、平静を装つている母親の体の周りに、＜b r＞  
昨日から、微かな緊張が漂つていてを感じていた。＜b r＞  
そして今日、明らかに異変が起つた。＜b r＞

＜b r＞

いつもの火曜日なら、出かける時に玄関で待つていて、＜b r＞  
あの半透明のゴミ袋が無い。＜b r＞  
平次はさりげなさを装つて言った。＜b r＞  
「今日、ゴミほからんでええんか？」＜b r＞  
「お父さん、氣イむいたから、持つてつてくれたからええよ」＜b r＞

明らかに嘘である。あの親父が「気が向いて」ゴミ袋など持つて行く訳が無い。＜b r＞  
何か、ある。＜b r＞

＜b r＞

何かは、やはりゴミ袋の中にあつた。＜b r＞

ゴミは、平次の家から離れたゴミ捨て場にわざわざ捨ててあつた。

＜b r＞

しかし探偵としての探索能力は、我家のゴミを見逃さなかつた。＜b r＞

「オカンの奴。いつも、ゴミ捨ての時、  
＜b r＞俺が、『蓬莱の肉まん黙つて食つたろ?』＜b r＞  
なんて、ゴミ見て指摘するもんやから、用心したな?」＜b r＞  
せやけど、その用心裏目に出了わ。＜b r＞  
なんとしても、オカンが俺に隠そつとした秘密を見つけてやるわ  
"＜b r>

＜b r>

「ミミ袋を破らないようにして中をあさる。」  
「

そんな平次を見つめる、通りすがりの人々の目は冷たかつた。」  
「

「

しかし謎を追い詰めようとするキラキラの平次には、

そんなものは、無いも同然だつた。」  
「

平次は、細かくちぎられた黒い紙を見つけた。」  
「

明らかに、普通の紙では無い。上等な紙だ。」  
「

カンは、それが目的の物だと告げていた。」  
「

平次は、ミミの中に散らばる「

すべての切れ端を集めてから、

「ミミ袋をきちんと閉め、ミミ捨て場を後にした。」  
「

「

平次は学校で紙片のジグソーパズルに熱中した。」  
「

一度は、和葉が寄つて来て何か話し掛けようとした。」  
「

しかし、無視すると、何も言わずに去つていった。」  
「

「

和葉は平次が事件に夢中になるあまり、

「自分がどんな匂いを発散させているか、」  
「

解つていらない、と気づいた。」  
「

そこで、注意しようとしたのだが、平次に和葉の声は入らなによつ  
だつた。」  
「

「ま、ええか。これで、平次にちよつかいかける女の数が減るわ。」

「

「神が見捨てし仔の幻影やで！あの、キザ野郎！」  
「

叫ぶと、平次は立ち上がった。」  
「

教室の皆、教師も含む、が、一齊に平次の方を見た。」  
「

「すんません、気分悪いんで早引けさせて下さい」  
「

ダメもとで、平次は教師に頭を下げた。」  
「

「ええよ、早ようお帰り」  
「

「ええよ、早ようお帰り」  
「

教師は、あつさりと承諾した。<b r>

教室から飛び出す、平次の背中に教師が声をかけた。<b r>

「帰つたらすぐ、風呂入りや！」<b r>

教室に爽やかな空氣が戻つて來た。<b r>

<b r>

形相を変えて、居間へ飛び込んできた平次を、静香は、平然と迎えた。<b r>

「おや、えらい早いお帰りで」<b r>

「オカソ！何で俺への事件の依頼を捨てたんや！」<b r>

「依頼やないで。招待状や。<b r>

もう断り入れたさかい、心配せんでええ。<b r>

それに、電話で確認したんやけど、あの毛利ハンもいかはるそうや。<b r>

若輩モンのあんたが出張る必要は、これっぽちも無いで。<b r>

「あんたの、すべき事は、試験勉強や」<b r>

「そんなもん、ここの件終わつてからで充分や！俺は行くで！」<b

r>

「ほうか、ほな、勝負するしかない様やな」<b r>

静香は端然と立ち上がつた。<b r>

<b r>

「平次、ズルは許さんで。新聞は二十枚や」<b r>

「アホか。この日は紙面が少ないんで足しとんや。<b r>

オカソ！こそ、こないだみたいに芯に木の棒入れたらあかんで」<b

r>

二人は、ひたすら、新聞紙を固く丸める事に力を注いだ。<b r>

<b r>

二人は、庭に降り立つた。<b r>

向かい合い、互いに丸めた新聞紙を構える。<b r>

一陣の風が二人の間に吹いた。しかし、二人は微動だにしない。<

b r>

と、急に静香の緊張がほどけた。 ＜b r＞

平次が打つて出ようと/orするより先に静香が大声をあげた。 ＜b r＞  
「あら？ 和葉ちゃん、 どないしたん」 ＜b r＞

平次は思わず、 屋敷の方を見た。 誰もいない？！ ＜b r＞  
「隙あり！」 ＜b r＞

平次を、 力の限り固く丸めた新聞紙の棒の乱れ撃ちが襲つた。 ＜b r＞

＜b r＞

平蔵が、 部屋に入つてくる気配がした。 ＜b r＞

平次は背中を向けたまま、 寝たふりをしていた。 ＜b r＞  
しかし平蔵は、 それに気づいている様だつた。 ＜b r＞

「あの招待状を、 見た時から、 いつかこないな日が来ると思つとつ  
たが・・・」 ＜b r＞

枕元に、 何かが置かれた。 ＜b r＞

平蔵が、 立ち去つて、 しばらくしてから、 平次は苦労しながら起  
き上がつた。 ＜b r＞

体中が痛む。 ＜b r＞

「何や？ これ？」 ＜b r＞

平次は紙袋をひっくり返した。 ＜b r＞

中から、 シップ薬、 打ち身の薬、 筋肉痛用の塗り薬が、 何種類も転  
がりでてきた。 ＜b r＞

「あ、 あん親父～。 人を馬鹿にしやがつて！」 ＜b r＞

平次は、 力いっぱいこぶしで畳を殴りつけた。 ＜b r＞  
すでに打ち身のあつた右こぶしは、 その酷使に耐え切れず悲鳴をあ  
げた。 ＜b r＞

そして平次も叫んだ。 ＜b r＞

「痛ええええ！」 ＜b r＞

＜b r＞

こうして、 全身打撲、 及び右第二指の骨折によつて、 ＜b r＞

西の名探偵は、 黄昏の館からの招待を欠席する事になつたのであつ

た  
< /font >  
< /p >

(後書き)

(なんじのたわ言)  
まあ、こんなお話でして  
格好いい平次君がお好きな方には「めんなさい」と  
しかし、あれほど意味ありげな招待を、  
平次君が「中間試験」などを理由に  
断るのは、あまりにもおかしいと考えまして(××)  
こんなお話になりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2283a/>

---

黒い招待状

2010年12月2日17時31分発行